

パートの運営、訪問サービス、通所サービス、相談業務サービス、医療サービスなど三五事業を運営している。利用者数は七〇〇名、職員数六〇〇名、年間売上高は二七億円に上り、中堅規模の介護業者である。

「介護士は一般的には数字を扱うのが嫌いで、自分で伝票ひとつ書こうともしない。なぜなら自分たちの仕事は高齢者と直接接する食事や入浴や排泄の介助であって、伝票書きなんてバイトの人でもできるでしょ、そう思っているからです。だからおむつの単価がいくらも関心がないし、お客さんである入居者から月々いくらいただいているかも知らない。ベッドが一つ空いたら、いったいいくら減収になるのかも意識していない。それでもかつては経営が安定していました。老人ホームの数が不足していて売り手市場でした。放つておいても入居者はどんどん来るし、介護士や職員もたくさんいたから、人手不足に陥ることもなかった。しかしいまは社会福祉法人だけが独占していた事業ではなく、株式会社をはじめあらゆる法人が参入し、高齢者の施設がどんどんつくられ、業者同士の競争が激しくなっているのです。お客さんの確保だけでなく、人材の確保もむずかしくなっています」

合掌苑は社会福祉法人としてそれなりの歴史がある。昭和二十年三月十日、深夜に約三

〇〇機のB29が低空で襲来して焼夷弾を落とし、東京の中心の街区も下町も焼け野原にされ一〇万人が焼死した。このときは山手はそれほどの被害にあっていない。その後、四月、五月にも連続して大空襲にさらされた。東京・中野の龍昌寺は一帯が焼け野原になった際、四方を銀杏の木々に囲まれていたため奇跡的に延焼を免れた。龍昌寺は被災者の救急救護所に早変わりした。

龍昌寺は戦後も行く場のない被災避難民八〇世帯の世話を続けた。ここで活躍したのが出家して僧侶となった合掌苑の創始者・市原秀翁である。

市原は三万人の犠牲者を出したインパール作戦に自動車部隊として従軍、右肩甲骨から胸にかけて銃弾を受け、盲管銃創（貫通せずに体内にとどまっている傷）の大ケガを負い、復員すると出家して価値のある生き方を求めて龍昌寺で活動することにした。

大空襲で被災した人びとはやがて親類縁者が見つかりそのもとへ帰ったり、働き口を探して独立するなどしたが、戦争で家族を失い高齢でおカネも仕事もない一六世帯二〇人ほどが残った。寺の境内に社会福祉事業の運営認可を受けた戦後第一号の東京都公認の老人ホーム「中野合掌苑」ができる。昭和二十八年（一九五三年）である。

市原はその後、昭和三十五年（一九六〇年）、いまは住宅地だが当時まだ畑が多かった